

その小屋は、ふもとから離れた場所にあった。
そもそも人が立ち入るような山ではないため、ここに小屋
があることを知る者はいないだろう。
お世辞にもきれいとはいえない外観だが、家としての機能
はしっかりと果たしているようだ。



雲が多いせいか、月明かりが遮られ、辺りは暗い。
唯一の明かりといえば、小屋から漏れる、小さな小さなろ
うそくの炎だけだった。





そしてきみと title を





声に驚き、一步下がると床にあった血を踏んだ。
手放されたドアノブは、扉はぱたりと閉まり、持っていた
ろうそくの火がかすかに揺れた。

「けがを、してるんですか？」

「放っておいてくれ」

「そういうわけにはいきません。見せてください。もしひ
どいようならお医者さんを……」

「いい」

「でも」

「いいんだ。君は、ここに住んでるの？」

「——はい」

ドア越しの会話は続く。

「そう。すぐに出ていく」

「血が滴^{したた}るほどのけがをしてる人がなに言ってるんです
か」

「すぐ治る」

「本当にそうなら無理せずここにいてください。その……
どうしても見せてくれませんか？」

「ああ」



「わかりました。無理に見ないし、この扉も開きません。
だから、せめてあなたのことを教えてください」

「……」

「私はマリー。あなたは？」

「……スミレだ」





「スマレはどこをけがしているんですか？ どうして、ここにいますか？」

「それを聞いてどうするの」

「扉越しでもなにかできることがあるんじゃないかと思って」

「声を聞く限り、マリーは若いだろう。できることがあるとは思えない」

「これでも多少の医学は学んでいます。お料理も、少しならできます」

それから、スマレの返答はなかった。

まだ質問に答えてもらっていないし、このまま彼を放っておくこともできない。

私はもう一度話しかけた。



「とりあえず、ご飯を作りますね」

返事はない。

私は調理台をきれいにしてから、簡単なお飯を作った。



野菜スープに切った果物、ちょっと固いパン。

外にあった井戸から水を汲み、お湯も沸かした。

ボウルに入ったお湯、きれいなタオル、ご飯を乗せたトレイ。

それらを扉の前に置き、トントントンとノックをする。





「ご飯と体を拭くためのお湯を用意しました。扉の前に置いてあります。私はロフトへ行きますから、よかったらどうぞ。……おやすみなさい」

ドア越しに伝えると、扉から離れ、ロフトへの階段をのぼった。

彼と同じご飯を食べ、ロフトにあるベッドに横になり、この日は眠ったのだった。

